
バビロン

某県民

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バビロン

【Nコード】

N8959Y

【作者名】

某県民

【あらすじ】

僕は茨城から大都会東京へ越してきたしがない学生だった。しかし、4月10日、僕の生活はとある一枚の紙切れ、「無法都市永住許可証」のために一変する。

「ようこそ、バビロンへ」

無法都市「バビロン」そこは名の通り、法秩序のない世界。倫理、世俗とはかけ離れた異質な空間。あるのはただ一つ。歪な「ゲーム」だけ。掛け金は己が命。配当金は「現金」「地位」「利権」なんでもござれ。欲望、謀略渦巻く異能混沌劇、始まります。

お気に入り、評価点、感想などいただけるととてもうれしいです！
よろしく願います。

新生活 一日目

今日は4月9日。春がいよいよにその暖気と、特有の霽囲氣を各地にもたらず今日この頃。僕、空丘詠^{そいつおかんあ}亜は布団から体を起こした。布団の上に立ち上がって薄いタオルケットのような掛布団を僕は二つにたたむ。この季節になってくると空気は暖かいもので、自然の布団のように僕に覆いかぶさってくれる。もとよりきつちりとした掛布団を持たない貧乏な僕にしてみればうれしい季節だ。たたみ終わった寝具一式を部屋の過度に積むと、軽い音とともにすこし埃が舞った。埃は春の木洩れ日を受けてわずかな光の軌跡を描く。それを目で追って僕は窓の外を見た。そこには黄色い朝日が葉の隙間から漏れ出し、なんともはかなげな、しかし今日という日を祝福してくれているような、そんな温かさを醸し出していた。

「おはようございますっ」と

誰も返してくれる当てのない挨拶。もちろん僕もそれは知っている。けどこれはずっと小さいころからの習慣みたいなもので、特に悪いことでもないと思っているので直すつもりもない。今日という一日を始めるという認識を僕は持つことを重要としているのだ。それは僕なりの流儀でもあった。つぶやきはこじんまりとした和室に少しだけ響いて消えた。布団とわずかな洋服、それと勉強道具一式。それしかないにもかかわらず僕の部屋は十分に圧迫されてしまっていた。僕一人が生活するうえでは全く問題はない程度ではあるが、一般的に言えば狭い部屋だ。そこには生活感はあるでない。洋服もきつちりとたたまれただけであるし、教材に至っては開いてすらいない。僕は洋服たちの中から一組を選び出すと、ほかの服を乱さないように慎重に取り出した。

「えっと…今日はこんな服でもいいよね」

僕は寝間着を脱ぎ、外に出かけるための服に着替える。脱いだ寝間着はきつちりとたたんでおいておく。あとで水で手洗いすることにはなるのだが、すこし気になってしまふのだ。うすい上着のボタンを数個止める。シャツの隙間からすこし鎖骨のあたりが見えてしまいう。僕としては何とも落ち着かないのだけど、この服をくれた人がこのように着ればいいといっていたのできつとそうなのだろう。まだ春なのにもかかわらず、すこし着崩した感じに見えるのが少し気になったが、与えてくれた人の好意をむげにはできない。着替えを終えた僕は洗面所へ向かう。そこはとても狭かったが、僕一人が使用するのなら何ら問題はないものだった。蛇口をひねる。外の雰囲気とは対を成すようにそこから流れ出す水はとても冷たかった。それに少し驚きながらも顔を洗う。顔に触れたそれは、手を感じるよりもことさらに冷たかった。

「けどすつきりしたね」

僕は少し独り言を言ってしまう癖があるのだろうか。新生活の始まりに少なからず浮ついているのかもしれない。もちろんその声にこたえる人はいない。タオルで顔を拭いて、視線を戻す。するとそこには人影が…そう思っ僕は内心かなり驚いたのだが、それは鏡に映っている自分の姿であつた。

「どんだけ寝ぼけてるんだよ…僕…」

自分の臆病さと間抜けさに内心がっかりしながら僕は洗面所を離れて、リビングに向かう。そうとはいつても、その一部屋しか洗面所を除けばないのだけど。肩から下げるポーチのような鞆に必要な最低限の貴重品を入れる。一人暮らしを始めた僕が持つ貴重品なんてい

うのはたかが知れていて、携帯電話と財布くらいしかない。ゲームや音楽プレイヤーはもっていない。少しやったことがあるくらいで、別段ほしいとも思わないので手に入れていないのだ。しかし財布と携帯電話だけではやはりバッグの中身がさびしい。そうおもった僕は教材一式の中から一つを中身も見ずに選び出し、かばんの中に入れる。

「うん、こんなもんでいいよね。持つてる実感ができた」

かばんは先ほどよりも重く僕の腕に存在を伝えてくれている。このくらいの重さがないと気持ちが悪いし、なにより鞆がスカスカで格好が悪いだろう。見栄えもそうだし、歩きたびに大きく揺れてしまふのは僕としても快適ではない。

「あれ、かばんいらないんじゃないかな…」

僕は少しだけそう考えたけれど、バッグを持たないで昼間からうつく青年はいい風にはとられないだろうなと思ったからやはりバッグはさげてくことにした。あらかたの支度を終えたので僕はもう一度部屋を見回す。そこにあるのは無機質な空間で、ちらかっているものもなかった。忘れ物がないことを確認すると僕は玄関へ向かい靴を履く。すると紐靴のひもを結ぶときに一度縦結びをしてしまった。どうやら今日の僕は少しおかしい。ふだんなら絶対にこんなことはしないのに。

「よし…じゃあ行つてきますね」

立ち上がって誰もいない部屋に言う。この独り言の多さはもしかしたら一人暮らしへの不安感からきているのかもじれない。返事がないことを確認して僕は満足すると扉を開ける。軽い金具のこすれる

音とともに春の空気が僕に絡みつく。部屋の中よりもさらに甘く、温かいその雰囲気全体を感じながら部屋の外へ。ドアを閉めて鍵をかける。なんとも質素な力ギであるがそもそもこんなところに盗みに入る輩もいないだろう。僕は大きく深呼吸をする。今日もまた一日がはじまる。けどそれは今までのものとは異なっていることは間違いないだろう。その期待に胸を膨らませて、僕はまだ未知の世界が広がる部屋の外、慣れない都会の喧騒へ向けて足を踏み出した。

白衣の青年

早朝にもかかわらず、町は喧騒に包まれていた。たくさんの同年代の少年少女が目の前を通り抜けていく。彼らの服装、髪型は、田舎のほうから引越してきた僕にはかなり刺激的で、驚愕に値するものであった。ある子は頭から7色くらいの髪をはやし、まるでミックスベジタブルのような有様であったり、またある子は鼻や舌にピアスをしていたりしていた。もちろん普通の恰好をしている人のほうが多いのだが印象が強烈過ぎてそれ以外をなにも覚えていない。まわりには田舎では絶対に見ることができないであろう高層ビルがたくさん並んでいたような気もしたが僕の意識の片隅に追いやられてしまっていたようだ。僕は生活に必要であろう生活用品をうつている店、スーパーなどの位置をあらかじめ確認し終えて、休憩のためにとある喫茶店にいた。町にはサービス業の店が多く、そのようなお店を探すのはなかなか骨が折れた。

「結構歩いたから疲れちゃったよ……」

そういいながら僕は細い足を軽くたたき。我ながらあれ程度の運動で足がダメになるとは思わなかった。自分のひ弱さに落胆しながら僕は注文したアイスティーとサンドイッチの乗ったトレイを受け取り、どこに座ろうかとあたりを見回す。すると僕の耳が何やら興味深い声をとらえた。

「聞いたかよ…今回も出たらしいぜ？」

「マジで…どんな感じだよ？」

「また女が殺されたのか？」

食事の場にはふさわしくない話題に大いに盛り上がっている少年3

人が喫茶店の隅にいたのだ。奇抜なファッションに身を包んだ彼らは声を少し落としてしゃべってはいるが、話の雰囲気を出すためであって周りの客への気遣いなどはかけらもないであろう。その証拠に彼らの眼は嬉々として輝いて、話している少年を見つめていた。けど僕にはそれを咎める勇氣はなかった。情けないとは思いつつ、しかし新しく生活することになった都市で何が起きているか知る必要があるだろう、そういつて好奇心を正当化した僕は彼らの隣の一人用の席に腰を下ろす。疲れてしまったし、喉も乾いた。まずはアイステイーを口に含もうと手を伸ばすと先ほどの少年が続けて口を開いていた。

「なんでもはらわた抜き出されて、それでぐるぐる巻き…ミノムシみたいにされてたらしいぜ…部屋一面が赤色だったらしいし」

「マジか、相変わらず頭おかしいな」

「けど今回もなかなかに愉快じゃん」

そういつて何が楽しいのか、ケタケタと笑う。その内容の悲惨さに思わず僕は少年のほうへ向きなおってしまった。興味、というよりも何かそれがとても重要なように感じたのだ。僕の視線を少しだけ怪訝な目で見た彼等であつたが、一度小さく笑いあうとすぐに話を再開する。先ほどまでより声を大きくして、手振りまで合わせて説明を始めた。

「被害者は若い女、結構有名な美人さんだったらしいが…ごあいにくだな」

「ってことはやっぱりあいつかよ」

あいつ。それが誰を指すのか、僕にはてんで見当がつかなかったが彼らはそれで通じ合っていたようだ。僕は彼らの話に耳を澄ませる。

「ああ、「殺人鬼」^{ベジタリアン}、またあいつだよ」
「いやあ、律儀だね。また女か」

また高らかに彼らは笑う。その時点で僕はやっと事態を理解した。

「^{ベジタリアン}殺人鬼」

それはネット上から生まれた一人の殺人鬼の名だ。いまやそれは社会一般でつかわれるようになっていく。国内外問わず彼は指名手配を受けている超危険人物だ。彼がなぜそこまで存在を知られているのか、それは彼の手にかけた人数、またその主義によるものだ。もはや彼の殺した人間の数は数えきれないほどで、記録では1000人ほどといわれているが、その程度で済んでいるかどうか：現在の行方不明者のうち数十名は彼の手にかかっているといわれている。そしてその被害者のすべてが女性であった。犯行現場は毎回によってその様相を変え、ある時は一面血の海、またある時はまるで外傷もまったくないような静かなものであったりした。しかし、どの遺体のも共通していたことが一つ。そこに彼の獲物であるナイフが毎回放置されていること、そして彼がおそらくこの行為を楽しんでいただろうという不気味な印象がその場には毎回残っていることがあった。その不気味な犯行理念、犯行現場、それがこの国の若者の危ないもの見たさを刺激してしまった。「彼は美人、もしくはかわいい女性しか殺さない」そんな噂がネットを通して飛び回り、その凶行に一つの名前を与えてしまった。それが殺人鬼^{ベジタリアン}。女しか殺さない殺人の菜食主義者である。一部の人間は何かのヒーローのようにすら思っている。そしてそんな最悪の殺人鬼の活動の中心がこの町であるのだ。

「…気味が悪いよね」

ご飯を食べ終えた僕は席を立つ。軽くなったトレーを返却コーナーに返す。奥には機械的に働き続ける若者が数名見られた。小さくこ馳走様とつぶやいて、僕は喫茶店を後にする。

するとどうやら先ほどの少年たちも落ち着いたようで、席を立つ。しかし、彼らはトレーを戻しに行くそぶりを見せることなく出口に向かってくる。彼らの背は思ったよりも大きくて、威圧感を溢れさせていた。それと視線を合わせるのが怖くて僕は急いで喫茶店を出た。

「さてと…次は…」

僕はバッグから地図をとりだして次の目的地を探す。土地勘などまったくないので、地図がないと僕は家にすらたどり着けないだろう。細い路地と、建物の名前とにらめっこを続けていると、ふと声をかけられた。

「お兄さんさ…金貸してくれね？」

声の主は先ほどの殺人鬼の話をすすんで披露していた少年だった。僕がそれを確認するころにはほかの二人が僕の周りを囲んでしまっていた。彼らは目をぎらつかせて僕を見ている。特に財布の入ったバッグをその双眸で見つめていた。

「なに言ってるんですか…」

僕は気が気でない。けどそれを見せてはいけないと頑張って取りつくろおうとするのだが、それも無駄なあがき…彼らには僕が弱い人間だと感じたのだろう。それは真実であるし、だから僕は彼らになけなしの金を渡そうとしている。この都市の治安が良くないというのは聞いたことがあったが、まさかここまで速い段階で絡まれると

は思わなかった。

「いや、さっき俺たちの話、盗み聞きしてたでしょ？情報量ってことでさ」

また下品に笑う。確かに盗み聞きをしていたけど…僕はそれがとても気に入らなかったが、何もしない。何もできない。ここで抗ったところで、きつと僕は暴力を受けてもつとひどいことを受けるのは目に見えている。僕はバッグから財布を取り出して、お札を数枚渡そうとして……

「何やってるの君たち？昼間からよくないねえ」

聞き覚えのない青年の声を聴いた。その声のほうを向くと、そこには白衣に身を包んだ、長身で細身の青年が立っていた。彼は癖のある黒髪を指でくるくるといじりながら、すこし上体を前へ傾けて、僕の周りの少年たちを見つめていた。彼は色白の腕をすらりと白衣のそでからのぞかせ、細い体をゆっくりと揺らしながら僕にちかづいてくる。腕と脚は驚くほどに細く、まるで針金細工のようであった。長い脚に似合わない短い足取りはどこか弱い。

「あ？誰だよ、おっさん」

その弱弱しさは少年たちも感じ得たようで、彼らは僕を見る目つきのままに彼を見ている。彼らからすれば獲物が一人増えたくらいの認識なのかもしれない。僕は困いが外れたことに少し安堵しつつも、その青年が気になって仕方がなかった。どう考えてもここでの介入はかれにとってプラスに働かないだろう。ましてや1対3、部の悪さは明白だ。それにもかかわらず、青年は相変わらず髪をいじる片手を休めようとせず、さらにはかけている質素な感じの黒縁メガネ

の位置が気になるようで、何やら独り言をつぶやきながらそちらもいじり始める。それがひどく自分を馬鹿にしているように見えたのだろう。少年たちの一人が青年へ詰め寄る。

「なめてんのか？ ああ！？」

「なんだか君のほうが僕よりおっさんさを感じるね…それ、まだ使ってる人いたんだ…」

その少年は怒り心頭したのか大きく声を荒げる。今にもつかみかかりそうなほどだ。僕はそれをなぜか息をのんで見守っていた。少年の憤激を見ても青年は相変わらぬ態度を見せ続ける。逃げればよかったものを、その場から僕は離れようとしなかったのだ。それは義務感なんかじゃなく、純粹な好奇心。まるで僕みたいな弱い青年が、果たしてこれから何をするのか、気になって仕方がなかったのだ。すると白衣の青年からふと声をかけられた。

「おっさんって…ねえ、君。僕、そんなに老けて見えるかな？」

黒縁のメガネをずらしながら彼は僕の眼を見つめる。不思議な雰囲気目の眼であった。しっかりと僕の眼を見ているのに、どこかつるなその視線は、若干の圧迫感すらあった。

「いや…どこも…」

「だよねえ…」

僕は反射的にそう答えていた。すると青年は満足そうにうなずいている。僕を含めて周りの4人は彼を怪訝な目で見つめる。

「だよね。よし、憂いも晴れた。お礼に君を助けてあげよう」

高らかにそういうと彼は髪とメガネをいじるのに使っていた両腕を白衣の中にしまいこむ。そうして彼は少年たちの前に堂々と仁王立ちした。そのあまりのギャップのある態度に少年たちはたじろぐ。その間青年は少年たちから視線を切つて、なにやら思わせぶりに頭をひねっている。しかし、少年たちもそれで引き下がっては格好がつかないと一歩詰め寄ろうとした。そしてそれに応ずるようにして青年がポケットから手を出して

「あ、あつたあつた。何万円くらいで引いてくれる？」
「は……？」

思わず驚きの声が漏れた。ポケットの中にあつた彼の手には、数枚の一万円札が握られていたのだ。彼はまた姿勢を崩して、10枚ほど数え上げる。その様子に少年たちも口をあんぐりとさせている。僕もそれは同じであつた。

「いやいや、白衣の中に入れてたんだけど、どこにあるかわからなくなっちゃってさ。ごめんね、待たせちゃって。そうだ、10万円くらいあればいいよね？」
「お。おおっ」

そういつて彼は10枚の一万円札を少年に握らせる。いまだに彼らは状況を飲み込めていないようで、気の抜けた返事を返していた。それを笑顔で見届け、手を振って追い払うと、青年は僕のほうへ歩いてきた。足取りは相変わらず弱弱い。少しでも触れようものなら形を崩してしまう針金細工のような人だった。

「ふふ、感謝したまえよ。僕に出会えたことを」
「あ、ありがとうございます……」

僕は一連の出来事に啞然としながらも条件反射的に礼を告げる。実際に助けてもらった訳だし、必要だろう。僕の謝礼をかみしめているのか、青年うんうんとうなずいている。やはり変わった人だ。すると青年はまた笑いながらいった。

「まあ、積もる話もあるだろう。あそこの喫茶店にでも入って語り合おうじゃないか」

そういつて僕の肩を抱く。まるで親友のような扱いであつたがもちろんそんな仲ではない。もちろん積もる話もない。だが言いたいこととならずこし前から積もり始めた。あなた、変な人です。

「良いですよ…けど変わってますね…」

「よく言われるよ」

彼はまたまた嬉しそうに笑うと白衣のポケットに手を入れて先に行つてしまった。先ほどよりも足取りが軽快に視えるのは気のせいだろうか。彼の白衣の裾を追いかけて、僕は先ほども入店したお店へ再度入ることになる。なんとも不思議でおかしな客だと思われるかもしれないが、構わない。あの青年と少しだけ話してみたい気がしたのだ。僕は浮ついた心を少しだけ抑えて喫茶店の扉を開けた。

渋谷の街

「じゃあ、このサンドイッチ一つとホットのコーヒーを一つお願いします」

店内に入るとすでに青年は注文を終えていたようだ。商品の完成を待つ列に並んでいる。彼は僕が入店したことに気が付くと、注文するように僕を促す。彼の白衣姿はあたりの人たちの注目を被いに引き付けていたが、しばらくするとあたりの人たちはみなそれぞれの仕事に戻る。たしかにあれだけ奇抜な恰好をした人間が通りにあふれているのだからこの程度の僕にとっての異常はかれらにとっては通常なのかもしれない。

「えっとじゃあアイスコーヒーをください。サイズは一番小さいのをお願いします」

先ほどこの店に訪れたばかりであつたし、昼ご飯も食べたばかりで僕はあまり気が進まなかつたので申し訳程度の注文をする。僕の注文を受けて満面の機械的スマイルを浮かべる職員の女性。その眼は僕を見ていない。仕事とはわかつてはいても、やはり気味が悪い。さつきも僕はこの女の子に注文をしたわけだが、向こうは僕が二回目の注文だとは全く気が付いていないだろう。その笑顔は僕を見てはいなかったのが何よりの証拠。彼女は仕事をこなす自分に笑顔で微笑んでいる気がする。彼女は厨房の人間に注文を回す。注文を受けて作業の音だろうか、軽い金属音が裏から聞こえてきた。

「しばらくおまちください」

そういつて軽く会釈をする。僕も反射的に会釈を返す。隣の白衣の

青年はまったく興味なさそうに、彼女の後ろでこうこうと輝くメニユー表を見つめている。僕はレジの列から一つそれて青年のいる注文の完成を待つ列へと並ぶ。すると青年にふと声をかけられた。彼はいまだに虚ろな目でメニユー表を見つめている。彼のその姿は針金のような身体つきも相まってどこか病的だ。

「そういえば、君、名前は？」

彼は僕のほうを見ずにいう。その態度は少し礼節にかけるところではないかと思っただけで、一度助けられた身であるし、そこまで僕は気が短い人間でもない。しかし、いくら恩人といえどもあつたばかりの人に個人情報教えてしまうのは危険だろうとも考えた。まずはこの人が信頼たる人物かどうかきっちり確認したい。僕はそう思っただけで口を開く。

「えっと…必要ですか？」

すこし言い方がまずかったかもしれない。少し警戒していることが丸わかりではないか。そう思っただけで自らの軽率さを恥じていた僕に、想定外の答えが返ってくる。

「いや、別に無理強いはしないよ…調べようとすれば簡単だしね。了解したよ。気にしないで」

彼は笑いながらそういった。最後に何か言っていたような気がしたが、僕にはよく聞き取れなかった。しかしそれを聞き返す気も起きなかった。僕たちは静かに商品の完成を待った。すると厨房からすこし人の声がして、僕たちの注文した品が乗ったトレイをレジの彼女が僕たちに渡してくれる。

「じゅっくりどうぞ」

また、貼り付けの好意を僕らにふりまくと、彼女は直ぐに次の客に向かい合っていた。

「へえ、君、こっちに越してきたばかりなんだ。それは災難だったね」

色白の青年がその細い指でスプーンを摘むように持って、砂糖とミルクをたつぷりに入れたコーヒーをかき混ぜる。水面に黒と白の螺旋が描かれたと思うと、それもつかの間、すぐさま一辺倒な茶色に変わってしまった。湯気がうっすらと浮かぶ。彼のわきには4つのガムシロップと、3つのミルクの空容器が無造作にころがっていた。

「はい。茨城県から引越してきたんです。ずっとそこにすんでましたし、都会にもきたことがありませんでした」

僕はストローを袋から取り出しながら答える。目の前には冷たいブラックのコーヒー。砂糖やミルクは入れない主義だ。ストローを包んでいた紙を小さく束ねると、僕はストローをグラスにさし、一口。ストローを黒い液体が駆け上り、口内に香ばしい苦みが広がる。

「ふーん、茨城ね。東京は初めてって感じかな。もちろんここ…渋谷もだよな?」。

「初めてです。東京といわず茨城の田舎から出たことがほとんどありませんでしたから。もうすべてのものが新しいといった感じです」
「あはは。おのぼりさんってやつだね」

彼はまた愉快そうに笑う。笑うたびに癖のある短髪が小刻みに揺れる。彼はコーヒーが茶色一色に混ざりきったにも関わらず、混ぜる手を休めない。そして、もう一方の手で癖のある黒髪をいじり続ける。なんとも落ち着かない青年だ。彼は眼鏡越しのクルリとした両目で僕を見つめながら続いて口を開く。

「なにが一番印象深い? いろんなものがあると思うけど」

そんな当たり障りのない話題。しかし彼の眼付を見る限り本当にそれが気になっているようであった。僕はそれに思ったままに答えることにした。

「…えっと、すごい色の頭…ですかね」

僕は至極真面目に答えた。僕にとってはあの得体のしれない髪は全く未知の存在であったし、最初あれが髪だとも思わなかった。頭の上に飾りを載せている変わった人がいるものだな、などと思っていたぐらいである。そもそも…

「はっはは…君、面白いね。いやあ、まあ確かに彼らの姿は一種の異形だよな」

僕の逡巡を遮るように青年の大きな笑い声が響く。それは店の隅々に響き渡るのにも十分なほどで、店員さんの痛い視線が僕たちに突

き刺さる。青年もそれを察したようで軽く頭を下げていた。わざとらしく頭をかきながら彼はコーヒーを口に運ぶ。甘いね、なんてつぶやいていた。

「高層ビルや、人通りの多さとかじゃなくて頭の色単体：なかなかセンスあるよ、君」

「そうですかね…」

彼はマグカップを下ろすと、また思い出したかのように笑い出した。笑いやすい体質なのか、いまいち彼が面白がっている理由が僕にはわからなかった。彼はしばらくその細い体をぴくぴくとけいれんさせていたが、落ち着いて着たようでもう一度、コーヒーを口に運ぶ。そしてまたスプーンを持ってコーヒーを混ぜ始める。新たに加えたガムシロップやミルクがあるでもないのに、ただただ繰り返す。

「それでほかには何か感じなかった？」

彼はいまだににやついていたが、先ほどよりも数段ましになってきている。そんな彼の口から震えた声で紡がれた。これには悩まずに答えることができる。僕は飲み干したアイスコーヒーを脇にどけていう。

「一言でいえば…不思議…ですかね」

また青年はうれしそうに顔を輝かせる。手癖、感情表現共に忙しい人だ。

「不思議…ね。確かにここ、かなりゆがんでるし。そう見えるのかなあ…」

彼はコーヒーをかき混ぜる手を止めて口元に運ぶ。湯気が彼のメガネを白く曇らせていくが、それを気にした様子もなく満足そうに笑う。甘過ぎたね、なんてつぶやいていた。歪んでいる。それが何を示すのかはよくわからなかったが、きっと先ほどのような治安の悪さのことであろうと勝手に納得する。

「僕みたいな、ずっとここにすんでいる人からしたらそんな考えは生まれないけれど。いいね、新鮮だ。じゃあ長く引き留めるのも申し訳ないね。次で最後の質問にしよう」

彼は上機嫌な笑顔のままに僕に最後の質問を投げかけた。その内容は僕の予想を、いや常識の範疇から大きく逸脱したものだった。

「君、今までにこの都市でバカみたいにデカイ西洋剣を片手で振り回してる白髪の男とか、バカみたいに鉛玉をばらまきまくってるキレた警察官とか、かるーく素手で壁をぶち抜いたりするメガネの青年とか…みてないよね？」

彼は言い終わると、マグカップを受け皿に戻して、髪をいじる手を止めて僕の目をのぞき込む。コーヒーを攪拌していたスプーンはその途中でぴたりと動きを止める。微動にしない。初めてみる彼の仕草に僕は息をのんだ。その力のない相貌からは似つかない、はつきりとした指向性を持ったまなざしが僕を見つめていた。まるで僕の奥底を覗き込まれているかのような、洗いざらいに調べ上げられているかのような嫌悪感すら生むほどに、冷たく、暗い、しかしそれに反して生気に満ち満ちたまなざしであった。僕はそれに気おされてしまつて、おぼつかない調子で答えた。

「そんな、人がいるんですか…？少なくとも…僕は見たことがないです」

彼は僕の言葉を聞いてもしばらく針金細工のように一つの形に固まっていた。その目だけが生き生きとまるで別の生き物であるかのようになに僕の全身を見まわす。

「あ、あの…どうしたんですか…」

僕はあまりの嫌悪感について口を開く。すると青年は大きく息を吐いて、イスから乗り出していた上体を背もたれの位置までゆっくりと戻した。

「いや、なんでもないよ。思い違いだろうさ。失礼失礼。ご馳走様でした」

彼は胸の前で合掌して軽くお辞儀をする。ご馳走様。彼の前のサンドイツと飲み物はすべて彼のおなかの中に消えてしまったようだ。座ったままに満足そうに腹をそらす。

「ありがとうね。有意義な話を聞けたよ」

すると彼は立ち上がりながら僕に手を差し出す。僕は一瞬だけ戸惑ったが、それが今はすたれてしまった握手の要求だと気が付き、あわてて手を差し出す。彼はそれを優しくつかむと軽く上下に振っていつも通りに笑った。僕も助けられたお礼を告げねばならないだろう。そう思って口を開こうとすると彼がそれにかぶせるようにしゃべりだしてしまっていた。

「一つ忠告。もし、もしもだ。いまいったみたいな奴らをみたことがあったり、見るものがあっても絶対に関わっちゃだめだよ。それがここ、渋谷で幸せに暮らすコツだからね」

「絶対に」彼は最後にもう一度、念を押した。僕には彼がなにをいつているのかはよくわからなかった。そんな不可思議人間などもちろんみたことがないし、いるとも思わない。しかし彼はそれ以上何かいっつもりが無いようで、先に店の外へ向かってしまう。もうドアを開けて行ってしまった。僕も急いであとを追う。彼のトレモきっちりと返却コーナーにかえし終え、足を出口に向ける。そして喫茶店の重い入り口のドアを開けて昼の喧騒へ身を晒す。

「あれ？」

しかし、そこには奇抜な容姿をした若者と、浮かれた若者たちで込み入った道があるだけであった。その中に白衣の青年の姿は見あたらなかった。

初登校

「おはようございます…」

僕は仰向けのままに目を開く。目にはくすんだ茶色の天井が一面に広がる。布団はほのかな温かさを変わらず僕に伝えている。時間は6時30分。そろそろ起きなければまずい。しかしその意図に反するようには、僕の体はまるで布団に縫い付けられたかのように動かない。違う。体中がけだるくて、起きようという気が生まれないのだろう。僕はそんな甘い考えに終止符を打って布団から這い出る。

「さむい…あれ、昨日もこんなだったっけ…」

しかし春とは思えない予想外の寒さに僕は体を震わせる。もう一度布団に戻りたくなる気持ちを辛くも抑えて洗面所へむかう。顔を洗う。水は昨日よりもひときわ冷たく、顔に強烈な刺激を与え、僕の眼を強制的に覚まさせた。続いてわずかな寝癖を直す。夜中、よほどに寒かったのだろうか。寝癖はほとんどたっており、寝相がよかったであろうことを物語っていた。

「朝ごはんは、コンビニで買うとして…よし、支度は確認済みだし…」

着替えをしながら今日の準備が完璧かどうかを確認する。今日は僕にとって一つの門出だ。できる限り無事に済ませたい。そう思ってたあたりを見回して確認をしながら服を着ていると、ワイシャツのボタンをかけ違ってしまったことに気が付いた。浮かれているのか緊張しているのかよくわからないような状態だ。あわててボタンをはずしてかけなおす。今度は問題ない。襟を立て、ネクタイを締

める。ネクタイの結び方は案外難しいもので、こちらに来る前に姉から教わったのだが、なかなか苦労させられた。

「よし、長さもおかしくないよね…」

身体全体を一面で映せる鏡なんて、この部屋にはもちろんない。結んだ時の感覚だけがたよりだ。最後に黒のブレザーを羽織る。

「よし。大丈夫だね」

僕はもう一度そういうと、床に置いてある通学かばんを手取る。よくある一般的な手提げ鞆だ。その中には筆記用具と必要な書類が入っている。しっかりとした革のカバンを持つのは初めてで、少なからず僕の心は躍っていた。大人っぽく見えているのかな。

「それじゃ、いってきます」

僕は普段どおりに誰もいない部屋へあいさつをして、外へ出る。昨日の様子に反して、早朝であるからだろうか、人通りも少なく、静かであった。今日は4月10日。僕が所属することになる高校の入学式が行われるのだ。

「ここだ…二回目だけど…やっぱり大きい」

僕は20分ほどをかけて高校の正門前までたどり着いていた。手にはビニール袋。来る途中に頼張ったコンビニのおにぎりの外包みがいまだに入っている。都会というのは自動販売機やペットボトルを捨てるゴミ箱は非常に多いのだが、あまりほかのゴミ箱がみられず、それを処分できないままに学校の前までついにたどり着いてしまっていた。来る途中にペットボトル専用のごみ箱からビニール袋が飛び出しているのを見てきたが、どうにもそこに捨てようという気は僕には起きなかった。

「それにしても…さすがの人の多さだよね…」

僕の周りには僕と同様の恰好をした青年が同じ方向を向いて歩いている。またうちの学校の女生徒であろう。その姿もちらほらとみえる。学校指定の黒を基調としたスカートとブレザーからなる制服だ。しかしその中でも確認の個性は色濃く表れていて、スカートの丈、アクセサリの有無など、さまざまな違いが視られた。女の子はいろいろと大変なようだ。

国際麻布学院。

日本国内でも最高峰の人気を誇る高等学校である。その魅力は渋谷という若者の地の中心に立地していること、そしてこの学校の特殊な教育理論にある。「好きなようにやってみなさい。それで結果がどうなるかと、君は満足するだろう。いや、しなければならぬ」創始者が残した言葉だそう。その一見、教育機関としては問題すら感じさせる教育理論を掲げるこの学校であるが、この国を支える数多の研究者、政治家を輩出している名門校でもある。その理由はこの学園の教育理念のたまものだと噂され、数多の学業的エリートがこの学校への入学を目指すのだ。しかし、彼らの素晴らしい学力を持つてもこの学園への入学は容易ではない。なぜならこの学校に

は他校では許されていないような特例があるからだ。それはこの学校の入学試験では面接試験のみが行われるということで、その一回の面接試験でもって合否を決定するということだ。それも学術的な口頭説明であつたりもしない。ささいなまるで日常会話のような面接試験だ。そんな特例がこの学校にはみとめられている。ゆえに、この学校の「学力」は決して最高峰ではない。もちろんいわゆる頭のいい人間、すなわち勉強のできる生徒も多数在校しているが、学校が求めているのはそれとは違う「頭のいい」人間だ。僕はこの学校を姉の勧めで受験し、見事合格を果たした。その時の合格通知に記されていた合格理由が今でも僕は理解できない。そこには「おもしろそうだったから」とだけ記されていたのだ。

「変わった趣向だね、やっぱり」

この学校の不思議な体制を今一度振り返って、この学校でこれからどうやって過ごしていくのだろうと考えているとふと僕に凜とした声がかけられた。

「君、新入生？」

女の子の声。僕の後ろから春の冷たい風に乗せられて、僕の耳に女の子の声が流れ込んだ。その凜とした印象に僕はとっさに振り返る。正門の反対側、散った桜の花びらがちらほらと地面を桃色に染める通学路。そこには黒一色、といった印象の長髪の女の子がいた。その長く黒漆に染められたように艶やかな髪を、春の風にゆらしながらこちらへ向かってくる。どうやら少し風が気になるようで、髪を手で軽く押さえながらであった。僕と同じ黒の通学かばんを片手に下げ、風に黒の長髪と落ち着いた長さのスカートの裾を揺らすその姿は桜の花びらの儚い桃色によく映える。

「あ、はい…」

僕は見とれてしまっていた。彼女の姿は人形のように…といってしまつては無機質な印象を抱かせてしまつかもしれない。それは生きている人形、とでも言おうか、そう表現するほかはないように整っていた。風がやんだ。桜の花びらも散つてこない。まるで時間が止まってしまったのではないだろうか。それほどまでに僕の思考は吹き飛んでしまっていた。しかしそんなわけはもちろんない。彼女は呆けている僕を見て静かに笑った。

「私の顔に何かついている？」

そういつて彼女はそのすらつと伸びた指でわざとらしく自らの唇のあたりを指す。その仕草は蠱惑的ですらあった。彼女がもちろんジョークで言っているはわかつてはいるが、それでも僕は動揺してあたふたと答えてしまう。

「いえ何もついてないです！その綺麗な顔には何も…あ…」

僕は自らの軽率さにはがみする。どうしてこう考えをぼろぼろと外に…

「ふふっ…ありがとう、うれしいよ」

彼女の体小さく弾む。どうやら笑っているようだ。風がまた吹き始める。彼女は僕の眼をまっすぐと見つめる。僕の心拍数は跳ね上がる。どくんどくん。なぜかこの人は僕の心をみだす性質でも持っているらしい。彼女はしばらく僕を見つめている。どくんどくん。もう限界だ。僕は目をそらそうとして…しかし彼女はそれを遮るよう

におもむろにこちらへ手を伸ばす。その指は僕の唇へと延びてきて…

「ご飯粒ついてるよ。初日から買い食い登校かな？」

そういつて僕の唇…のわきの白い粒をとる。ああ、もうダメ、気が持たない…。なんだか僕はこの人が苦手だ…。完全にペースを握られている。なんで僕に声をかけたんだ？いや僕がなんだかおかしいだけなのかも、などと考えて今度こそ目をそらそうとすると、僕の視界の隅に桜色の花びらが映る。それを見た僕は思い付きの反撃を、とっさに行動に移してしまった。

「桜の花びら…ついてます…」

僕は彼女の黒髪にのつた髪留めのような桜の花びらを外す。その時に軽く触れてしまった彼女の黒髪は、絹のような滑らかさであった。彼女は僕の大胆な反撃に少し戸惑っているのか、固まっている。そして僕も自らの予想外に出過ぎた気障な対応にびっくりしていた。反撃をしたつもりが逆にまた僕が焦り始める。もはや何がしたいのかわからなくなってきた。互いにしばらくはそのまま止まっていたような気がする。それこそ本当に時が止まってしまったかのように、むしろ止まっていてほしい。しかし間に舞い降りた一枚の桜の花びらがそれを砕いた。

「いや、これはやられたよ。案外やるね、君」

そういつて彼女は頭に手を当てて、大げさに笑った。僕はそれをぽかんと見つめる。そんな僕をおいてけぼりに、彼女は言う。

「私は九条静香^{くじょうしずか}。この学校で2年生をやっている。君の先輩にあたるかな」

そういつて手を差し出す。僕は精いっぱいの勇気でもって握り返した。

「空丘…詠亜、です」

僕はそういつて…最後にやはり僕は、うつむいた

夢沢幸也

「それでは入学式を開始しますので、一年生は講堂へ集合してください」

校内放送が響き渡る。僕は一年D組の教室でそれを聞いた。今日執り行われる予定がある事柄は入学式だけで、その集合は7時30分に講堂とのことだ。なので教室での集合義務はなかったのだが、僕はこの学校の雰囲気にはやくなれたこともあって早めに登校した。そのおかげで静香さんに出会うこともできたことを考えると早起きは三文の徳などと言葉もあながち間違いではないかもしれない。けれど彼女がなぜ僕に声をかけてくれたのかは分からなかった。

あのあと僕と先輩はともに下足室までの道のりを歩んだ。その短い時間で僕が越してきたこと、都会が初めてであることなどを告げ、先輩からはこの学校の基本的な構造などの手ほどきを受けたのだった。そのあと僕たちは下足室で別れた。入学式まではまだ時間があつたので僕は自分が所属することになる1年D組の教室で時間をつぶしていたのだ。そこには数名の生徒がすでに各人さまざまな姿で時間をつぶしていたが、それぞれの間に会話はなく、席に突っ伏していたり、教室の窓から外を眺めていたりとばらばらであった。

僕もその中で席に座ってのんびりと時計を眺めて時間が流れることを待っていた。

ち…ち…ち…。

誰もしゃべらない空間の中で時計だけがむなしくその針を進める。時刻は7時15分。入学式開始15分前だ。僕は講堂に向かうために立ち上がる。

「さてと…階段を降りて…あっちだよ」

静香さんの説明に聞いた道順を反復する。彼女が言うにはこの学校の敷地や施設の多さは僕たちのような新入生にとっては迷宮と同義とのことで、きっちり講堂への生き方を教えてくれたのだ。僕は席から腰を上げ、教室の扉から出ていこうとする。すると教室の中から少年の声が聞こえてきた。どうやら同じクラスの子のようだが。

「講堂つてどうやっていくんだっけ？」

金髪。僕はそれだけで少し警戒感を持つてしまうのだが、彼の姿をよく見るとあながちそうでもないのかもしれない。彼は制服のワイシャツの裾をだらしく出していたりはいし、耳に穴が開いていたりするわけでもない。あの金髪はただのファッションなのかもしれない。顔立ちもよく見ると子供っぽく、少年的な生き生きとしたイメージだ。体つきは中肉中背といった感じで、僕みたいなものやしっことは違う。

彼は教室の中で席に突っ伏していた男子生徒に問いかけているようだが、聞かれたほうの生徒は気まずそうに聞こえていないふりをしていた。確かに少年の髪は金色にめられていて攻撃的なイメージを生むかもしれない。彼を避けてしまいたい気持ちもわからないではないが、それにしてもあの態度はひどいだろう。

「おーい、おーい…寝てるなら仕方ないか」

その少年も彼が無視しているのは知っているだろう。けれどわざとらしく「寝ている」といつてあげる彼は、かなり人が良いのかもしれない。彼は少し残念そうな顔をしていた。僕は廊下に背を向ける。まだ15分もあるし、ここで寄り道をして問題はあるまい。

「ここからでて階段をおりて…というか僕も今から向かうんで一緒にどうですか？」

僕は彼の隣まで近づいていき、手を差し出した。僕たち一年生はそこに集まる義務があるのだ。なら説明するよりも一緒に行ったほうが楽だろうと僕は軽い気持ちで彼に同行をすすめた。少年は僕の声に勢いよく振り向くと表情を一変させ、とてもうれしそうにその顔をゆがめる。そして僕の手を勝手にとって強く握りこむと、これまた勝手にこういった。

「俺、夢沢幸也ゆめざわ ゆきやよろしくなっ」

「よ、よろしく…僕は空丘詠亜そらおか ぎあっていうんだ…」

彼はぶんぶんと組み合った手を振る。提案というニュアンスを込めて差し出した手を取られるとは思わなかった。僕はそれに流されるがまま、苦笑いしながら、自己紹介をするしかなかった。外では徐々に生徒たちの喧騒が高まりつつあった。

「へえ、お前は引越してきたのかよ。俺なんかずっとこんな荒んだ都市に住んでいる身だからそういうのに少し懂れてんだけどさ」

階段を降りながら幸也は言う。僕たち1年生の教室は3階にあつて、一年生全員が集まれるような大規模な空間はもちろん1階にある講堂しかない。そこへ向かつて僕らは怪談を下っていた。

「そうなんだ。けど、あそこ何もないよ？こっちのほうがいいこといっぱいあっていいんじゃない？」

僕たちは一階と二階の間にあたる踊り場を回る。ちらほらと二階に教室がある二年生とすれ違う。彼らは入学式への参列が必要ないので、談笑しながらのんびりと教室へ向かっているようだ。僕は少しびくびくしながら階段を下って行く。隣の幸也は相変わらずで、上級生に物怖じている様子もない。彼は最初の印象の好青年といった感じで、しゃべる内容もしゃべり方も不良な感じはまったくない。すこし言葉遣いは荒いがそれはこの年代の少年ならよくある口調だし、僕と彼が同年であることもある、何ら問題はないだろう。

「そか？こつちにあるもんついたら摩天楼とゲーセンくらいだよ。あとはきたねえ空気ぐらいしかねえよ」

「それならこつちにはきれいな空気と自然ぐらいしかないよ」
「俺ならそつちをとるね」

そういつて大きく口をあけて笑う。そんな彼の姿をみると僕もなんだかうれしくなってきた。口の端が不覚にもひきつる。この男とはどうやら人間通しの波長が合うようだ。一階まで降り切り、僕らは外に出る。そこには新入生で大きな人の流れができていた。それは等速度でゆつくりと講堂へと流れ込む。

「これに流されていけばいいね」

「ああ。だかのまれてどっかいくなよ。校長の話の間の暇つぶしの相手がいないとつらい」

「そうだね」

彼は真顔でいった。僕はなんだかそれがうれしくて少し笑ってしまった。それを不思議に思ったのか彼がいう。

「何かおかしいなと言ったか？」

「いや、なんにも」

僕はまた笑いながらいつてしまった。それを受けてなおさらに目を丸くした彼であつた。

「変な奴」

「そうかな？」

僕らは人並みに流されて講堂の中へ入る。それから自らのクラスの差席スペースへ向かう。クラスとしてのくくりさえ合っていれば、その中でどこに座つてもいいようなので僕と幸也は横に並んで座り、開会を待った。

「諸君、ようこそ麻布国際学園へ。ここでは……」

7時30分。定刻通りに入学式が始まった。最初は恒例の校長のあいさつのようで、壇上ではこの学校の校長先生が軽く一礼をしているところであつた。壇上の校長先生は若い男性で、長身、体つきもしっかりとしていて整ったオールバックの頭髪もあいまっていわゆる校長先生の型からは大きく逸脱しているように感じた。だがこの学校の校風も考えればあながちおかしくはないのかもしれない。周りにいる生徒も多種多様で、入学式にノートパソコンなどを持ち出してきている子もいるし、そうと思えば校長の姿を凝視し続けている女の子なんかもいる。改めてこの学校の異常性を痛感していると、となりの幸也がいった。

「飽きた」

「はい？」

唐突に紡がれたたった一言の彼の意志に僕は困惑する。まだ始まって1分、いやそれすらもたっていないぞ…。

「え、まだ始まって少ししかたってないし、話す内容が面白くないと決まったわけじゃないから…確かに校長先生の話はつまらないって相場はあるけど…」

僕は幸也にそう諭す。いくらなんでもこの段階で決めつけるのは良くないだろう。だが幸也が少し不機嫌そうだったので、僕は少し下手に出た。今の「飽きた」の一言。彼は吐き捨てるように淡泊に言った。

「いや、たぶん話は面白いと思うぜ。けどあの男がどんな奴なのか、大抵わかった気がするから飽きたって言ってんだよ」

「どうということ？」

彼は相変わらず不機嫌そうに言う。その眼はもはや校長を見ておらず、僕の瞳をただただ見つめていた。黒く、黒い、どこまでも黒い瞳。初めて凝視した彼の眼は怒気 of 感情が含まれているわけではないが、「怖い」そんな印象を少し受けた。

「なんとなく、第一印象ってやつだよ。俺はそれを大事にしてんだ。それであいつは最悪、そしてお前は最高。以上」

「あ、ありがとう…」

彼はそれ以上言う気がないようで、僕から目線を切って軽く体を丸める。どうやら昼寝を決め込むようだ。僕は話し相手が必要だとまで言ってくれた彼に申し訳なくなつて、必死に話題を絞り出す。そして最初に思いついたものをそのまま口に出す。それはこの間の喫

茶店で再認識した脅威だ。

「^{ベジタリアン}殺人鬼って…どう思う？」

僕は小さな声で彼にだけ聞こえるように言った。すると彼はその背をピクリと動かして顔を上げる。そうしてゆつくりと彼は僕のほうを向く。彼の暗い瞳、それが暗いままに輝いていた。それは鈍い金属特有の輝きのようであった。

「しってるのか？」

彼は今までと雰囲気を一変させて言う。どこか生気がなく、うつろだ。しかしそれに反してその瞳の輝きはそのきらめきを強めているような気がした。

「いや、小耳にはさんだ程度で…」

僕は少し気圧された。もしかしたら彼の親戚もしくは友達が被害にあっているのかもしれない。やつの手にかけて人数は数知れないほどである。近くにその被害にあった人間がいてもおかしくはない。

「そか。あ、別に俺は被害者とかじゃないから、気にするなよ。お前、顔に出てる」

しかし彼はすぐに移動中のような快活な表情を見せる。僕はそれに少し安心して、肩の力を抜く。そんな僕を見て幸也は笑う。

「お前、わかりやすくていいよな」

「なんだよ、それ」

僕は少し口をとがらせていう。彼は悪びれた風もなく笑う。まるでさきほどの僕のようなのだ。これは彼なりの仕返しなのかもしれない。すると彼は進んで殺人鬼についての会話を再開した。

「ベジタリアンんだ。殺人鬼だっけか。そうだな、まあ悪い奴って認識でいいんじゃないの？」

彼は軽い口調でそういった。彼の意外な対応が喫茶店の少年たちの言い方と重なって見えて、僕は少しだけ怒気を含んだものいいをしってしまった。

「何人も殺されているんだよ。そんなやつを野放しにしているの？」
「まあそう考えるのが妥当だろうけど。たとえばだ、もしそいつが殺したくないのに病む負えなく殺していたらどうするよ？」

彼は僕のわずかな怒気など素知らぬ顔で軽い口調で問いを返してくる。僕はなぜだかムキになって反論をする。

「そんなわけないだろ。あんなにひどいこと、好き好まないとできないだろ。ましてや、もう100人以上殺してる……」

僕はそこで言葉を切る。これ以上はこの雰囲気気まずくするだけだろう。僕はこの話題を切り上げようとするが、幸也是れにかぶせて続ける。その眼は僕をまっすぐにとらえ、有無を言わせないほどの鋭い威圧感のあるものだった。

「やっぱりそうなるか……。オーケイ。じゃあ見方を変えてみよう。あれも一つの才能じゃないかな？」

「どういうこと……？」

「あれだけの人を殺してもつかまらないって……すごくないか？」

「君は……!!」

僕は入学式の途中であるにもかかわらず、すこし声を張り上げてしまった。周りの生徒の視線が僕に突き刺さる。それにも僕は構わない。この男は僕の思ったような男ではなかった。喫茶店にいたようなあんな奴らと同じ…

「まあ、まてよ。落ち着けて。なにも俺はやつを肯定しているわけじゃないさ。この話はあくまで前座だ」
「どういうこと?」

彼は語気を強くしていった。軽く手振りを交えながら続ける。

「あくまで俺があいつを才能と表現したのにはわけがある。なにもあんな気違いじみた奴を見とめているわけじゃない」

「じゃあどういう意味なの」

僕は少し落ち着いて答える。どうやら幸也が殺人鬼の所業を見とめていないというのは本当のようである。自らの大人気のなさを恥じる。

「才能。そう考えてしまう人間が事実この日本にはたくさんいる。
だから奴は殺人鬼なんて名前すら持つている。いいよな?」

「うん…」

その通りで、彼の手際にあこがれて奴の模倣をする犯罪者すらいる。

「そして、だ。いかにもそういう「才能」が好きそうな人物がいるんだよ。いや人物というか機関かな?お前も知っているはずだぜ」

僕は彼の話の聞き手に回る。先ほど声を荒げてしまった手前、こちらからしゃべりだす気は起きなかった。

「誰？わからないよ。そんなおかしな人」

もちろんそんな知り合いは僕にはいない。ましてやこちらへ出てきてまだ3日目だ。知り合いなど幸也と先輩くらいしかない。白衣の青年は…どうなんだろうか…。

「そうか？結構身近なだけだな。オーケー。じゃ教えてやんよ」

彼は言葉をためる。ちょうど僕が催促の声を上げようとしたところで幸也は言った。

「それはここ、国際麻布学院。入学試験の志向がまさに「さまざまな才能」を求めているだろ？そして驚きがもう一つ。どうやらここ、国際麻布学院に殺人鬼が入学したっていう噂が流れてる。いやあ、怖いもんだね」

そういつて彼は笑って、僕は笑えなかった。

壇上では校長先生が終わりのあいさつとともに軽く頭を下げていた。

お届け物

「どういうことだったんだろう…幸也のやつ…」

彼が最後に入学式の終了とともに告げた言葉。殺人鬼ベジタリアンがこの学校にいる。それがいまだに僕の心をとらえて離さなかった。

「そんな馬鹿な話があるの…？」

時刻は夜中の11時30分。僕は自室の布団の上であおむけに寝転がり、天井に向かってつぶやいていた。茶色にくすんだ表情のある天井は、僕の言葉を黙って受け止めてくれる。その後、彼は終了と共に「用事がある」といつて早々に姿を消してしまっていた。それを引き留めることもかなわず、僕は一人、帰路についたのだった。家までたどり着いて、少しかだけ高校生はじめだということに慣れない予習に取り組んでみたりしたのだが、どうしても彼の言葉が引っ掛かる。

「ただのジョークだよね…」

僕は自分に言い聞かせる。しかしそこで気になるのは彼の表情だ。あの真剣そのものだった彼の眼。それが僕の自己暗示すらも妨害する。僕の考え過ぎだ。小心者の僕が勝手に思い込んでいるだけだろう。そう何度も繰り返して頭から追い出そうとしていたら、気が付けばこんな時間になってしまっていた。いまだに遠くからは喧騒が響いてくるが、このあたりの住宅はほとんどが光を落して寝静まっている。対照的な明暗が窓の外には広がっているだろう。

「そろそろ寝ようかな…明日から学校だしね」

僕は真上にぶら下がる電灯のスイッチに手を伸ばす。それを下げて電気を消そうとした、

ぴんぽーん

それを遮るように僕の部屋の呼び鈴になった。それは空虚な僕の部屋に響き渡る。

「だ、だれ…？」

時間が時間である。深夜、日付が変わろうというタイミングだ。宅急便、ない。郵便、それもなし。幸也？あるわけない。九条先輩？どんな素敵な思考をしているのだ、僕は。あらかたの選択肢を上げてみた僕であつたが結局今の状況に当てはまりそうな人は浮かんでこなかった。もしかしたら怖い人かもしれない。僕はそう思うと布団で縮こまってしまった。

するともう一度、

ぴんぽーん

催促するかのような二回目の呼び鈴。僕は戦慄する。このままここで居留守を決め込んでいてもきつといい方向には転ばない。どうせ最後には扉を蹴り破って入ってくるのではないか、そんな疑心が生まれ僕は布団から起き上がる。夜の空気はパジャマ一枚、布団から抜け出したばかりの僕には少し冷たかった。決心をして玄関へ向かう。あれ以降呼び鈴はなっていない。扉の外に気配も感じない。僕は最後に扉ののぞき穴から外をうかがう。するとそこには燕尾服にシルクハットといった容貌の人間がまっすぐにこちらを見つめていた。その眼だけがぎよろりとうごめき、僕の視線と合致する。

「ひっ！」

それと目があったように感じた僕は思わずしりもちをつく。なんだなんだ、こんな時間に何の用ですか！僕は内心かなりパニックになりながら腰を上げる。まだ扉の向こうにいるのだろうか。体つきを見る限り男性のようであったが、顔はよく見えなかった。なぜだか彼の眼にだけ注意がひきつけられて、ほかの部分はまるで影になっていたかのような、そんな印象を受けた。

「どなたですか…」

僕は扉越しに勇気を振り絞って問いかける。しばらく何の返答もなかった。そのまま5分ほど固まっていただろうか。すると扉の向こうから男の深みのある声が響いてきた。

「空丘詠亜様ですね？」

「は、はいっ！」

唐突な開口に僕は動揺する。なぜ僕の名前を知っているのだろう。標識には「空丘」としか書いていないはずであるのに。僕はなおさらに扉の向こうが怖くなってきた。

「^{オーナー}創作者様からのお届け物です。印鑑の準備をお願いいたします」

男は届け物を持ってきたという。その思ったよりも優しい口調に僕は安堵する。しかし怪しいことには変わりはない。僕は一度布団のそばまで戻り、今日一日持ち歩いてきた印鑑を通学カバンから取り出す。そして急いで玄関まで戻るとゆっくりとその扉を開けた。パジャマ一枚で触れる外氣に一瞬だけ身構えたが、外の空気は家の

中よりも暖かく、湿っていた。そして目の前には声の主がいた。彼の顔はシルクハットの影に入り、いまだにのぞくことができない。

「夜分遅くに申し訳ありません。こちらへ印鑑をお願いいたします」

目の前の燕尾服の男はそういつて一つの黒い封筒と共によく見られる宅急便の受取書を取り出していった。僕はすこし考えてからその隅に捺印をする。怪しい気はしたが、この奇妙な雰囲気の間から早く抜け出したかった。それを見た男は軽くうなずくとその受取書をポケットの中にしまいこみ、もう一方の手に握っていた黒塗りの封筒を僕に両手で差し出した。

「では、確にお渡しいたします」

「あ、はい…」

男はきつちりと45度のお辞儀をすると、一歩下がり、そのまま夜の街に消えていった。

「はあ。なんだったんだ…」

僕は布団に戻りながらつぶやく。こんな時間に届け物をする郵便局など聞いたことがない。これが都会なのだろうか。僕は男の去ってゆく姿を見届けると大きく息を吐く。僕は扉を閉めてから、受け取った封筒を眺めた。黒一色。宛名も住所も何も書いていない封筒。中身はなんなのだろうか、持っている感じからすると何かがぼつんと一枚だけ入っているような、その程度の重さしか感じない。透かしてみようにも黒がそれを阻む。

「開けていいのかな」

布団に横になってもう一度天井を見つめる。しかしそこには黒の封筒と言う新入りがいる。

「けど、明らかに怪しいよ…これ」

黒一色の封筒など聞いたことがないし、持ってきた男の容姿も異常であつた。まるで執事のような男であのような郵便局員はいないだろう。

「いたずら？ 違うよなあ…」

僕はこの封筒の扱いに逡巡する。明日あたりに交番に届けるのがいいのだろうか。時刻は11時54分。もう日付も変わる。この封筒のことは明日考えよう。そう思つて僕は電気消して、掛布団に手を伸ばす。封筒を枕のわきに置き、一日の終り、「おやすみなさい」、とつぶやこうとしたところでまたしても異変は起こつた。

「え、なに…」

僕の枕元、その置いておいた黒い封筒が突然に白い輝きを見せたのだ。その光は布団で横になつてゐる僕の眼に突き刺さつた。軽い視界消失に陥る。

「痛つ、なにこれ…」

一面の白。初めて体感する感覚に僕は布団のなかであえぐしかかつた。しかしそれもすぐに回復して僕に視界が戻ってくる。そしてその視界の中央。いままで黒い封筒があつた位置。そこには黒い封筒は存在せず、一枚の銀色の手のひら大のカードが転がっていた。突然の出来事に困惑しながら僕はそれを拾い上げる。

「カード…?」

その銀色のカードからはいまだにほのかな白い光がこぼれ出している。それはまるで雪のように空を舞い、そしてはかなく消えていく。

「綺麗だな…」

などと僕は間抜けなことを考えていた。しかし、すぐにこれの異常性を痛感する。先ほどまでであったはずの黒い封筒は枕元にはないし、その切れ端らしきものも見当たらない。僕は一度切った電灯のスイッチをもう一度つける。周りの空間が明るく照らされるがいまだにカードからは光が零れ落ちる。光というよりもそれは白そのものであるかのようにであった。

「なんなんだろう…おもちゃかな」

僕はカードをつまんで顔の高さまで掲げてみる。変哲もないただのポイントカード程度の重さしか感じないが、このどこに光を出すからくりがあるのだろう。材質はなんなのだろう。そう思って観察を続ける。

「発行の準備をいたします。このカードを顔の高さまで掲げてください…確認しました」

「え?」

急に室内に女の人の声が響く。周りに人はいない。隣の部屋から響いてきたわけでもない。その音源は僕の目の前のカードであった。

「え、もう一回いってください」

あまりに連続する得体のしれない現象に僕は混乱していた。なぜかただのカードに対して敬語を使うまでになっていた。もちろんカードはそれにこたえるわけはなく…

「それでは無法都市永住許可証の発行作業に入ります。しばらくお待ちください。5分ほどで発行いたします」

「は、はい」

もう訳が分からない。なんだ、その何とか許可証っていうものは。僕は早くもこの荷物を受け取ってしまったことを後悔し始めていた。居留守を決め込むべきだった。

「うん、疲れてるんだね。寝よう。うん、寝よう」

自分がつかれているとしか思えない。こんな非日常的なことが連続しているなんてありえない。いまここで起きている事実を認識したくなくて、僕は布団の中に閉じこもる。ひとりでに輝きを放ち続けるカードは布団の下にしまいこんでしまおう。そう思って布団のそばに置いてあったカードに手を伸ばす。するとカードの驚きを上回る異常事態がダメ押しとばかりに発生した。

「詠亜くん、いますかぁー!!」

ガラの悪い男の声。それが聞こえたかと思うと、薄い木が割れる軽い音と共に僕の家の扉が拭き飛んだ。比喻でもなんでもない。けりぬかれた扉は僕の就寝スペースまで飛んできたのだ。僕は布団から跳ね起きてそちらを少しだけ覗き込む。そこには顔に傷がある体格のがっしりとした男たちが5名、僕の家 of 狭い玄関の外に控えていた。先ほどの燕尾服とは違う。露骨に表れている暴力的な恐怖。そ

して、彼らの手には…

「拳銃…？」

近代の大発明。その存在だけで数多の命を刈り取ってきた黒い暴力の形が握られていた。

「さてと、簡潔にかつスマートに、って言われてるんで…詠亜くん、そのカード俺たちに渡してくれねえかな？」

男の一人、顔に大きな傷を持った金髪の男は銃口を僕に向けた。それだけで僕の足はすくんでしまう。男の眼は僕の手に握られているカードだけを見ていた。そして拳銃を通して直線的に伝わってくる男の暴力的な意思は、強烈に僕を穿つ。そしておそろく…

「ほら、手が滑ってこれをあれするといけねえからよ？」

拳銃で僕を殺すこともためらわないであろう。春のやけに湿った空気が僕の肌をなでまわし、背中を汗が這い降りて行った。

登録完了

電灯がちらつく室内。その不規則な点滅は僕の眼の奥をリズムよく刺激する。不快感にも似たわずかな昂揚感が僕を感覚が覆う。今まさに銃を突きつけられているのにもかかわらず、僕の心はなぜだか落ち着いていた。

「聞こえなかったかな？」

目の前の背広の男がいう。彼の耳には大きなピアスが飾られていて、頬の傷もあいまって凶暴な印象が溢れ出していた。

「その光っているカードをこっちに渡せ、って言っているんだが？」

彼以外の男はなにも動かない。しかし彼らの手にも、話している男同様の拳銃が握られている。その黒光りする暴力の存在だけで僕は動くことができない。心の平穩に反して、僕の口は動こうとすらない。しゃべろうにも口が動かない。唇は乾き、空気をすうことに必死でまるでその姿は餌を食べている金魚のようだろう。

「ただいまの進行状況は35%です。発行作業終了まで残り約3分です。しばらくお待ちください」

僕の隣には未だに光を放ち続ける白銀のカードがある。そこから機械的な女性の声が聞こえてくる。その内容が今の僕にはまったく分からない。

「たく、時間がねえ。早く渡せよ。悪いようにはしない」

男が僕の家へ踏み込む。足取りはゆつくりと、自らが吹き飛ばした扉だった木材を踏みしめてこちらへ向かってくる。木材の割れる軽い音が小うるさい。

「な、何なんですか…」

「答える義務はねえよ」

必死に絞り出した僕の言葉も男に一蹴される。もはや彼らは目前へ迫っていた。彼が踏み出すたびに拳銃の光沢がその様相を変える。その様はまるで獲物を見つけた獣の瞳のようだ。

「人の家に勝手にあがってなんてことを…」

してくれるんです！

僕の精一杯。非常識に対するために絞り出した常識。それに重ねるように軽い音がした。

パチュン

本当にそんな陳腐な音。

僕はそれが何の音であるか、分からない。だが目の前の男がしたことならば分かる。一目瞭然、奴は引き金を引いたんだ。つまりそれは…

「撃つたの…？」

男は少しキョトンとしていたがすぐにその顔を歪める。

「なんだ？その間抜けな質問は。ほらそこ、みろよ」

そう言つて彼は僕の足元を指差す。その先には焦げ付いて香ばしい香りを上げる畳があつた。どうやら摩擦ですり切れたようで、黒ずんでいる。

「あ、あは…」

仮初めの昂揚感など覚めていく。彼は僕に向かって撃つたのだ。たしかに推測はしていた。この男たちは本当にやると。しかし改めて感じる生命の危機は僕をすくませるには十分すぎた。そしておそらく次はない。男の表情が物語る。

もうあきらめよう。先ほどの男の時のように、すべて投げ出して相手に任せよう。

諦めることに對して僕は未練何度ないし、その判断も冷静に下せた気がする。僕はカードを地面から拾い上げる。渡してしまおう。それでできつと僕の日常は歸ってくる。

「わか…」

肯定。彼らの暴力の前には僕程度の日常などかすむ。その肯定。一歩踏み出す。

「わからないな。それは可能性だぞ？少年」

唐突に響く女性の声。カードから？否、それは僕の背に当たる窓の外から聞こえてきた。

それが僕の前進を引き留める。ついに極限状態からなる幻聴か、などと思つていると何やら様子がおかしい。僕相手に絶対的な優位にあるはずの男達が揃つて顔を歪めていた。中心の男は特にそれが顕

著で、目で見えるほどに焦っていた。

「っち！」

男が大きく舌打ちをして僕に向けていた銃口を僕の肩の先、壁の向こうへ動かした。どういうことだ？僕の背には壁しかないはずなのに。そう思って振り向こうとする僕の耳に軽い金属の接触音が響く。おはじきをしているかのような軽い音。視界の隅、屈強な男たち。そのすべての男の手から拳銃がはじかれていた。

「それを無碍にする必要はないだろうに」

爆音。そして爆風。それは僕の背後、すなわち住居の壁をぶち抜いて現れた。

「私なら活かす。君はどうする」

突如の爆風に大きく体勢を崩しながらも、僕は声の方向へ向き直る。もはや壁が吹き飛んだ事には驚きもしない。

「少年？」

一人の女性がそこにはいた。黒のタイトなスーツに身を包み、綺麗に1つのお団子にまとめられた髪はごく一般的な会社員にすら見える。彼女はそう僕に問いかけて首をかしげる。この状況さえかんがみなければ、常識的な風貌だ。しかし彼女の手には男たちの持つものよりも更に異常な物体があった。それは自動小銃、男たちの持つものよりも何周りも大きい、戦争の一部がそこにはあった。

「あ、あなたは…」

彼女は僕の隣までヒールを鳴らして歩いてくる。軽快な音。屈強な男たちを前にしても、彼女のはなつ威風は全くしおれない。

「30秒後、目と耳を塞げ」

「えっ？」

すれ違う。そのときに彼女は軽くつぶやいた。有無を言わせない、そんな力強い一言。けれどそこに目の前の男たちのような高圧感はない。

「こんな深夜に迷惑だろう、おまえ達？」

僕のとたりをすり抜けると彼女はにこやかにいう。その銃口を男たちに突きつけながら。

「許可証持ちがなんのようだ……」

男はその顔に目で見えるほどの汗を滴らせながら言う。

「ほう、私が誰かはしっているか。しかし安心しろ。今の私に許可証を行使する気はない。よかったな」

彼女はその視線を男から外さずに笑う。その挑発的とも取れる態度。しかし男たちはそれに食いつかなかった。いや、動けないのか。彼女の自動小銃は5人の挙動を縛る。彼らの銃も先ほど叩き落とした。

「お前たち、どこの差し金だ？まあ、風貌から察するに「商会」あたりか……」

「お前に、教える必要はない」

男は震える声で言う。

「だろうな。私もその情報はそこまでほしいものでもない。今日はこういう「ゲーム」だ。この子はもらっていくぞ」

女性はそれを気にしたこともなく言う。そして僕のほうへ振りかえる。向けていた銃口も真下へ向けてしまう。

「え……」

それはどう考えても悪手。相手は銃を落しているとは言っても、その腕は屈強な兵器だ。そしてそれは事実。彼らに付け入るすきになる。僕の視界で彼女の肩越しに地面を思い切り踏み込む男の姿が映る。女性はいまだに気が付いていない。男は腕を大きく振りかぶり、拳を握りこむ。しかし女性の表情はいまだに余裕にあふれていて、歌でも口ずさんでいるのか形のいい唇をテンポよく動かし続ける……しかしそれをよく見ると、同じ単語を繰り返し唱えているようだ。口の形から考えると

「30……秒？」

30秒、何だそれは……僕は記憶を急いであさりだす。30秒、30秒……

「あっ……!!」

僕は急いで目を閉じる。そして耳に指を差し込む。突如、つんざく閃光。その源は部屋の片隅からだろうか。部屋一面が白に染まり、爆音があたりを包む。僕も目を覆ったにもかかわらず、若干のめま

い覚える。

「ふう、すこし焦ったよ少年」

そんな中スーツの女性は片手に自動小銃を担いだままに笑う。そしてもう一方の手を耳に伸ばす。

「耳栓はやはり気持ちのいいものではないな…」

手の中には小さな筒状の物体が握られていた。

「手を離すわけにはさすがに行くまい。もしも対応されたときどうしようもないからな。まあ、この様子だと杞憂だったようだが」

「そ、そうですね…」

唐突にしゃべりだす彼女にあっけにとられながらも、僕は返事をする。彼女の後ろには昏倒している男たちが床に転がっていた。彼らは閃光と爆音をもろに受けて、脳に強いショックを受けたのだろう。平衡感覚は消滅し、視覚的なショックで気絶、そんなところだろう。

「やはり、スタングレネードは便利だな」

「は、はあ……」

そういつて彼女は僕の隣までやってくる。今見なおしてみると彼女は背が高く、その鋭い眼は僕を見下ろしていた。

「許可証はしっかりと持っているか？」

「許可証…ですか…」

僕は「許可証」が何のことを指すのかが明確には分からなかったが、

一つだけ心当たりがあった。

「このカードのことですか？」

僕は手に持っているカードを掲げて見せる。それを見ると彼女は安堵したように言った。

「よし。どうにかクリアといったところか。ふう、疲れたな…」

彼女はそういつてスーツのポケットから煙草を取り出す。慣れた手つきでジッポーをこすり、タバコに火を付ける。春の夜に煙がくゆる。

「あの、あなたは…」

「わたしか、ああ、自己紹介が未だだったか。悪いな。私は御影由真、警察官だ」
みかげ ゆま

煙りを吐きながら言う。なんとも心地よさそうに煙をくゆらせる彼女の姿は様になっていたのだが…

警察？ 壁を吹き飛ばしたのに？ 自動小銃を持つてるのに？ スタングレネードをさも当然のように使用しているのに？ …胡散臭いにもほどがある。

「なんだ、そのジト目は…まあ、いい。そろそろ呼ばれる頃だろう」「呼ばれる？」

「登録作業がそろそろ終わるだろう。あと何秒くらいだ？」

それに答えたのは意外にも僕の持つ銀色のカードだった。

「発行作業が終了しました。登録者、空丘詠亜様」

カードがなおさらに光り輝く。僕の周りが白に染まる。目の前の由真さんすら霞む。先ほどの閃光も比にならないほどの白。それが部屋を埋めていく。消えていく視界。白に埋まる直前、カードのアナウンスが響く。

「ようこそ、バビロンへ」

僕の意識はそこで途切れた。

観測者

一面の黒。その中に一人の青年がいた。床も、壁も、空も、そこには区別がない。一面の黒。まるで宇宙のようなその空間で、青年は車いすに座って何もなはずの空間を凝視していた。その長い白髪が黒に映える。

「ええっと。およそ半数といったところかな。新規市民が増えたみたいでよかったよ」

何やら一人でつぶやいている。黒の中にそれにこたえるべき人など存在しない。けれど彼はまるで誰かに語りかけているかのように、身振りさえつけている。

「けど半数の子は残念だったね。まったく、誰が狩りつくしたんだか」

車いすを回す。彼の腕は不自然なほどに白く、その空間から際立って見えた。天地を定義するものないこの空間でその車椅子はどこへ向かうのだろうか。

「またお金を用意してあげないとね」

彼は虚空に軽く手をかざす。するとそこには一万円札の像が浮かぶ。何も見えなかった空間に突如生まれたそれに向かって彼は言う。

「いつも通りよろしくね。あ、少し多めがいいと思うよ」

それだけいってもう一度手をかざす。そうするとその空間は元の黒

に埋め尽くされる。

「よしっと。これで「ゲーム」の報酬はクリアだね」

車いすからは金属のこすれる音が時折聞こえてくる。

「けどまさかここまでやるとは思わなかったなあ。容赦ないよね。新人君たちに牙をむくなんて」

笑う。どれほど進んだだろうか。黒は依然として薄まらない。この空間に果てはあるのだろうか。

「それほどまでにお金が大事なのかな？ いや、それともただの趣味かな？」

手をかざす。そこに現れたのは先ほどのものとは違うアイコン。それはレポート用紙のようなアイコンであった。その表面には何やらびっしりと文字が敷き詰められている。

「ふうん。若が自ら動いたんだ。それなら納得の結果…あれ、けどそれにしても被害が少ないね」

青年は指で用紙を送る。文字がすさまじい勢いで流れていく。青年の眼が機敏に動く。そこには人名と何やら数字が羅列されていた。そして自然と停止した。どうやら文書はそこで終了しているようだ。

「あ、由真ちゃんか。今回はそちら側で参入したわけだね。どんな心境の変化なんだろうかね。僕にはわからないや」

彼はそういつて笑う。ひとりでに微笑む彼の姿は少し不気味だ。

「あの子も守る側で働いてくれたんだ。ふむふむ。今回のゲームもみんなうまく動いてくれたみたいでうれしいよ」

笑う。しかしそれはどこか嗤っていたような気もする。

「さてと、許可証の割り振りもしないといけないね。忙しくなるぞ、うん」

青年は腕まくりをする。その白い肌が黒の中で怪しくきらめく。

「さてと、めでたくみなさん我が都市の住民となったわけだ。まずは言わせてもらおうよ。おめでとう」

だれへ向かっていつているのか。わからない。しかし青年の視線はどこか一点を確実にとらえていた。

「この都市は自由だよ。本当の自由。まあ、少しばかり「ゲーム」に付き合ってもらうけれども、それはあくまで楽しい余興だからね。気にすることでもない」

彼は車いすの車輪から手を放す。小さな音を立てて動きを止めた。

「ではみなさん。この都市のルールを説明しよう。君たちがこの都市でどんなことをして、どう生きるのか。それは僕にとってすごい興味のある事象だし、価値があることだから。つぶさに観察させてもらおうよ」

両手を広げる。白が空間を侵食する。黒は徐々に後退し、彼の存在が空間を覆う。色あせた白の先。そこに広がっていたのは渋谷の街

並みであつた。駅前大きな交差点。その中央に車いすに乗った彼は、満足そうにたたずんでいた。

「大丈夫。君たちの生きた軌跡は、僕がきっちり責任を持つて後生に残してあげるからね。もちろん私情ははさまない。歴史の観測者、この世界、バビロンの責任者として引き受けよう。ほら、そこで見ている君も、一緒にどうだい？」

彼は唐突に振り向く。そこには誰もいない。不気味なほどに静かな渋谷の町並みが広がるだけだ。だが彼はそういつて、最後に満足そうに笑った。

チュートリアル

「ここは…」

僕はゆっくりと体を起こす。体に目立つた外傷はなく、頬のかすり傷程度であった。きている寝間着も無傷だ。

「…僕の家だね。ひどいなあ」

自らの家の有様に愕然とする。もはや部屋として機能することは難しいだろう。壁の向こうには黒い夜が口を開けている。

「カードは…あつた…」

ぽつりと漏らす。少年の手には銀板のような重厚感のあるカードが握られていた。

「これが光って気を失って…どうなったんだろう」

あたりを見回す。周りに人はおらず、部屋の惨状が広がるだけである。

「由真さんは、いないね」

思わずそう漏らしてカードに視線を落とす。銀色のカードは答えない。僕は玄関へ足を向けた。

「今何時くらいなんだろ。時計も壊れちゃったし。携帯もどこにあるのかわからないや」

どうやら僕は気を失っていたようだ。どれだけの時間が流れたのだろう。現在の時間を知りたい。しかし外は暗闇一色。深夜であるところまでは分かっても何時なのかまでは分からないような状況であった。それに気が付いて、大きく息を吐く。

「何が起きたのか全く分からないけど」

嘆息しなら言う。苦笑、といった感じた。部屋の中央に戻るために踵をかえす。すると玄関からみずからの部屋をもう一度眺める形になる。

「そうだ、この惨状、大家さんに教えないと！」

僕はアパートを借りている身である。本来の大家にこの状況を伝える必要があった。このアパートの大家はこの建物の一室に在住している。惨状を見直したことで思い立ち、僕は玄関から外へ出ようとする。パジャマのままに靴を履き、扉のない玄関を出ようとしたところで不意に女性の声が上がった。

「チュートリアルをはじめますか？」

「今度は何！！」

その声に引き留められ、足を止める。

「ここは無法都市、バビロンです。この世界では様々なことに自由が許可されています」

ひとりでに紡がれる女性の声。それは手に持つカードから聞こえてきていた。僕は困惑する。このしゃべるカードには振り回されてば

かりだ。

「バビロン？無法都市？」

聞きなれない単語に首をかしげる。それにこたえるようにカードは告げる。

「空丘様は幸運にも無法都市民としての権利を手に入れました。おめでとうございます」

困惑は深まるばかりだ。しばらく銀色のカードを見つめていた。すると眼の前に青白いディスプレイのようなものが映し出される。しかしそれ自体も映像で触れることはできない。そこには何やら不気味なデフォルメされたどくろのマークが映し出されている。それを出力しているのはこのカードのようだ。

「この世界はあなたの知る世界とは大いに異なります。最初にこの世界のルールを説明いたしましょう。適宜、質問がございましたらどうぞお聞きください」

その声が聞こえるとディスプレイの表示が切り替わる。どくろの文様は透明度を上げ、背景に回り、手前に大きくいくつかの項目が箇条書きに記された。それを恐る恐る読み上げる。

- 1、「無法都市」
- 2、「許可証」
- 3、「ゲーム」
- 4、「オーナー景品」
- 5、創作者からひと言

「なんなのこれ」

一通り読み上げた大きく息を吐く。あまりにも自らが知っている日常とは異なる事態。わけのわからない夢のいたずらだと思うのが妥当であるが、直前のあの事件がそれを遮る。拳銃を持った男たち、そして自動小銃を担いでいた由真の存在。あまりにも強烈に記憶に刻まれたそれは、この状況を夢だと断定することを妨げる。

「何かのゲーム？」

僕はあまり知りえない分野であったが、一度だけゲームをプレイしたことがあった。姉の勧めでプレイしたジャンルはRPGと呼ばれるジャンルであった。その説明もこのような感じであったかも知れない。

「いいえ、「ゲーム」はまだはじまっておりません。ご安心下さい」

「まだ」という言葉が気にかかったが、それをカードに問い直すタイミングがなかった。カードは自発的に説明を始める。それを奇妙に思いつつも、布団の上まで戻ると、胡坐をかき、自らの前にカードを置いてしっかりと聞く姿勢を整えた。

「それでは説明に入らせていただきます。よろしいですか？」

「お願いします」

「それでは…まずはこの都市の概要についてです」

カードはその小さな体から大きな映像を照射し続ける。そして「1、「無法都市」」の文字が大きく青色に輝いた。すると画面が切り替わり、詠亜の見覚えのある渋谷の街並みが広がった。

「ここは無法都市「バビロン」です」

カードは無機質に続ける。

「渋谷じゃないの？」

カードに問いかける。このカードはどういったからくりか、自らの問いに答えてくれる時があることを僕は理解していた。しかし彼の周りの様子は自らが気を失う前に忠実であった。それを見てもここがバビロンなどという自らの知らない場所であるとは考えられなかった。

「いいえ、ここはバビロン。渋谷などという狭苦しい都市ではありません」

無機質な声は若者にあふれ、個性が氾濫している渋谷という都市を狭くするしいと表現した。

「この都市ではあなた方が言う、いわゆるルールは適用されません」「どういうこと？」

「そうですね。例を上げてみましょうか」

画面が切り替わり、莫大な文字列が詠亜に示される。それはどうやら法律の条文のようだ。

「法律、憲法、条例。そのどれも私たちの都市には干渉できません。もし在住者が望むのであればこんなことも可能です」

さらに画面は切り替わる。いくつかの写真が周りを覆うように映し出された。その近未来的な趣に少し心を躍らせていたが、そこに浮

かび上がった映像に僕は愕然とする。

「この在住者の方は自らの殺人願望をここバビロンで満たしております。そちらの世界では殺人鬼などと呼ばれていると聞いております」

そこにうつしだされていたのはミノムシのように天井からつるされた女性の姿だった。おなかを大きくさかれ、赤黒い腸をそこから引き出されている。そしてその腸でもって体をぐるぐる巻きに縛られている。それはまるで蓑のようであった。肉塊の蓑。それが女性の長いつやのある黒髪でもって天井からつり上げられていたのだ。ゆっくりと揺れる。時折小さな音がして髪の手が千切れていく。

「…これって！」

この惨状を知っていた。これはまさに喫茶店で少年たちが話していた通りの犯行現場。そして女性の隣には赤黒い武骨なナイフがごろがっていた。小さなナイフ。おそらくそれだけで殺人鬼はこの惨状を生み出した。詠亜の背を気持ちの悪い汗が伝う。あまりの衝撃的な映像に僕の平静は瓦解した。

「この方はかなり前の段階から無法都市へ在住されており…」

もはや耳にそのアナウンスは入らない。

「どうなってるんだよ！ここはなんなんだよ、なんでこんな場所に僕はいるんだよ！」

燕尾服の男、拳銃を持つ男、由真。必至に押さえつけていたそれらの不安感が爆発した。玄関をパジャマ姿のままに飛び出す。

「…それでは、チュートリアルを終了します。どうか、世界にお気を付けて」

玄関から外へ出た時、僕の手の内、銀色のカードは最後にそういつて、白のきらめきを失った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8959y/>

バビロン

2011年12月5日21時52分発行